

仲程シゲさん

1929(昭和4)年8月19日生まれ
当時の本籍地 沖縄県
民間人
大里村第2国民学校高等科
沖縄



- 1944(昭和19)年から壕掘りで兵隊が来た
独立重砲兵第100大隊が陣地構築をしていた。
入れ替わり立ち替わり20人ぐらいが家に来て住んでいた。中の1人に、お兄さんのようだった宮城の人がいた。
- 1945(昭和20)年3月23日の空襲後、実家を離れて南部へ
障害者のいとこ姉妹(15歳と5歳)を置いて出た。戦後悔いが残った。
- 1945(昭和20)年6月 真栄里(まえざと)の壕から摩文仁(まぶに)へ
真栄里付近に2つの壕があった。そのうちの1つに家族と親せき11人で避難。穴を掘って荷物を真ん中にして隠れていた。1週間ぐらいで米軍の戦車が近くにきた。
防衛隊から帰ってきていたおじさんが、「やつらに殺されるくらいなら自分で死んだ方がいい」と言って手榴弾を出した。母が、「子ども5人、どうして殺せるか、まず待ちなさい」と言って抵抗したので助かった。
70m ぐらいの山を越えて摩文仁の方に出た。そのとき、山の途中で砲弾に当たり、おばさんは即死。おじさんもけがをして動けなくなった。虫の息のおばさんは、母が「姉さん、戦争が終わったら迎えに来るからね」と言ったら、最後の大きな息をして死んだ。おじさんは、宮崎に疎開している息子を頼むと言いながら残った。水の入った一升瓶を置いて、「兵隊さんが通ったら飲ませてもらうように」と言っておいた。
逃げる途中は焼け野原で、死体だらけ。お腹がふくらんで真っ黒で男女の区別もない。悪臭が大変なので、ヨモギの葉を鼻につめたりした。
- 1945(昭和20)年6月20日前後 摩文仁(まぶに)で
摩文仁の平和の礎(いしじ)の近くの岩山の下辺りで、日本兵が沖縄の兵隊を殺すのを目撃。
沖縄出身の若い兵隊が、「このままでは生きていかれませんかから捕虜になりましょう」と言った。日本兵2人が出てきて、「こんなやつがいるから」とこの若い兵隊の首を切った。
他にも捕虜になろうと話しているおじさんたちがいて、「女の人は荷物を置いて、男はふんどしになって捕虜になろう」とズボンを下ろしかけていたが、若者が殺されるのを見て慌てて上げていた。
空襲と戦車砲と艦砲にかこまれて立ち往生しているときだったので、みんな右往左往。首を切った日本兵に「私たちも殺して」と言おうとしたが、もういなくなっていた。
荷物を置いて崖を下りることになった。崖のところには自然の道もあったが、この人間ではないので分からなかった。知っていれば崖を下りなくてもよく、荷物も持っていられたのに。
逃げていた途中は、芋のでんぷんと黒砂糖を混ぜて水で溶いたもので命をつないでいた。
崖を下りていて、裸足なのでサンゴ礁で足を切った。崖を下りてからは、あそこの洞窟、ここの洞窟と転々としながら逃げていた。途中、水のたまった穴に落ちたことがあったが、母が襟首をつかんで引っ張り上げてくれた。
「もうここで死ぬ」と言ったこともあったが、母が「どうせ死ぬなら帰って死ぬ」と言ってお尻を押し上げてくれたりして生き延びた。洞窟の中には水があったから生き延びることができた。食料がないので、出るべきものが出なかったのもよかった。着の身着のままだから。
外では、「出てこい出てこい、日本は戦争に負けました。ぼくはハワイの沖縄出身の者で、皆さんを助けに来ました」と言うのが聞こえたけれども、絶対信じなかった。
- 1945(昭和20)年6月26日 投降
日本の兵隊には、人を殺す人もいればよい人もいて、「米軍は住民は殺さないから出て捕虜になりましょう」と言うので、出ることにした。この本土出身の兵隊のおかげで今がある。
置いてきた従姉妹も、家にいた兵隊も、首を切られた兵隊も、平和の礎に刻まれている。これをただの名前と思わないでほしい。声なき声、悲しみ、憎しみ、恨みを感じてほしい。
(取材日:2012年2月4日)